

## 岡山藩「江戸ぎん御船歌」についての一考察

森 明 子

旧岡山藩の蔵書の中に、江戸ぎん御船歌なる写本の一冊が収められていた。他藩の幾つかの御船歌と同様、藩政時代の筆写と思われるものである。この写本は虫損の為、随分と穴もあいており、判読に困難な箇所も幾つかあったが、それだけにこの御船歌の書かれた時代の古さを自と物語っているようである。この写本にはかなりの量の長歌が収録されているので、他藩の御船歌との比較も可能であるし、またそれによって我藩の御船歌の特徴もより一層明確なものになってくると思う。それでは比較する前に、徳川幕府の時代に隆盛であった「御船歌」とは特にどのような歌をいうのか少し説明しておくことにする。

## 一

「御船歌」は江戸時代、將軍や諸侯の乗船の際に、或いは新造官船の進水式の時などに歌うものとして特別に各藩で創作されたもので、別名「御座船歌」とも呼ばれるものである。従ってこの御船歌は、一般庶民の水夫や漁師達の歌う作業歌とか民謡とかの類ではなく、幕府・諸藩の水軍に従事した「御船手」「船手頭」「水主」等と呼ばれる役人によってのみ歌われ保存、伝授されていったものである。「初めは武家の教養趣味に即して、謡曲や狂言小歌風に作詞・作曲するもの、木遣音頭を取り入れたものなどが多かったが、後にはその時々々の流行小歌や浄瑠璃を撰取して、其の曲数を増し、大体、元禄時代前後には、その歌が成立したものと思われる。」（続日本歌謡集成、巻三、S 36・9 東京堂）

これらの御船歌は各藩の官船のもとで、藩主の権威の一端を示すものとして、また当時の歌謡の隆盛を反映して、極めて華やかに歌われたことが記録から伺うことができる。我藩の「朝鮮くとき」の歌においては、

扱山海の珍物数を尽して金銀の、いろへ彩色七五三

エイ

おふねをかざり花やかにあかねむらさき家々の、思

ひく／＼の幕の紋ニイ 錦をかざる粧よもぎをげにやたゝ 吉野龍田の花紅葉 さつと乱したことなくニイコノイヤ 新造  
御座船に鶴拍子そろへて歌でやろ ニイ 見や太鼓たたを打うち(ち) ならし ニイヤヨニイヤコノ 漕けやこけ こけはそ程なく播ま

御座船を美しく飾り立て、太鼓を打ちながら、御船歌を賑やかに歌って漕ぎ行く様が目に浮ぶ。

江戸時代を通じて盛況であった御船歌の写本が現在かなり残されている。浅野建二氏の報告によれば、約六十冊余りのものが知られている。(続日本歌謡集成、巻三) これらの中に岡山藩のものが重要な一冊として加わるであらう。

御船歌は名称の上で、小歌、組歌、切歌(端歌)、長歌、口説(話)、枕などと別かれているが、長歌、口説、枕は大体同一の形式である。御船歌は形式が種々であるばかりでなく、内容の点においても多数のものを包含している。それは成立当時の流行歌ばかりでなく、御船歌本来の祝い歌、浄瑠璃、民謡、門付の歌、室町時代の謡曲に及ぶ広範囲なものである。このような複雑な構成をしている御船歌は歌謡的にも重要な意味を持つものとして注目に値する。

御船歌は数多く、豊かな内容を持っているにもかゝらず、特別階級のものとして秘密伝授された為、今に残るものは少ない。御船歌は各藩独自のものが存在していたのであるから、当然郷土と親密な歌が含まれていてよい筈であるが、その土地との結び付きのある歌は極めて少なく、反対に各藩の共通歌がかなり存在しているのである。例えば岡山藩の御船歌の最初の「かさり」は、浅野藩御船歌集(続日本歌謡集成、巻三)では「祝揃」、尾張船歌(続日本歌謡集成、巻三)では「正月くどき」、また幕府の御船唄留(近世文芸叢書、俚謡第十一)では「祝儀」としてそれぞれ同一歌が収録されている。このことについて増田欣氏は「幕府の御船歌や、各地に残る御船歌ともかなり共通するところから考えて、もともと幕府の御船歌であり、それを大坂御船手を介して移入したものと推定

される。従って郷土性が極めて稀薄である。」（続日本歌謡集成 巻三）と浅野藩の御船歌について説明しておられる。岡山藩のものもそのような形で移入されたものと思われるが、我藩のものには郷土性の豊かな歌が幾つか含まれており興味深いものである。

## 二

題名は「江戸ぎん御船歌」とあり、表紙の中央に墨書されている。大きさは縦 26 cm、横 15 cmで、表紙は茶色の和綴じである。五十丁一冊で歌数は四十六番である。表紙裏には「十二日、十三日、十八日、廿一日、廿六日、晦日」の日付が施されているが、これはこの御船歌の歌われた日の記録かと想像されるが正確な意味はわからない。一丁目から目次で

かさり	黄帝	はつ春
太平楽	七夕	昔かたり
都あたり	寝乱髪	魚そろへ
桜そろへ	清水参	船黄帝
黄帝	そめ色	秋の寝覚
あつもり	御乗初	しほくみ
ねさめ	秋のゆふへ	かた
朝鮮くとき	藤戸	都の名所
冷せひ	高鵜詣	大和路
酒くとき	香具うり	花ひん揃
初はる	鳥そろへ	黄昏

はつ音

いなり

松そろへ

井筒

四季

明ほの

和せん

高しま

嶋里

竹生嶋

たかま

子の日の遊び

年たま

### 歌数四拾六番

とある。

書体は大胆な変体仮名が用いてあるが、写本の痛みが激しく判読の困難な箇所も出たが、それらは推測によったり、或いは他の御船歌集や関係歌謡と思われるものを参考にして補ったが、依然不明な箇所が残されている。

この写本の歌の表記には、他藩に施されているような節付けや歌役を示すものは全く見られず、ただ囃子詞が片仮名によって区別されているのみである。

又序文も與書きも存しない為、この写本の書かれた年代や、成立事情は想像による外はないが、藩政時代になったものであることは殆んど確実なことと思われる。

### 三

#### 1 形式

浅野藩の御船歌に見られるような、切歌、小歌、組歌形式の歌は全く存在せず、四十六番全て長歌の形式をとっている。

#### 2 留め方

「うれし」または「めでたい」で終る歌が十七例あり、これは祝い歌の内容を持つものの留め方に用いられてい

る。他は様々であるが、遊里趣味の恋愛歌には「こひには」(秋の寢覚)、「こひに」(井筒)、「ゐきてよしなの」(寝乱髪)、「みそもじ」(たかま)など詠嘆的な留め方が多い。

これが浅野藩の御船歌においては「うれし」(「此松はや」ほか幾変化がある) 渡シテ上 めでたのゝゐいそりゃ若附ケ 枝もゐいゐいさかゆのう ゐいゐいはもし」か或いは 「君を」(「そさま」「そもじ」など) 渡シテ 恋にはのゐいそりゃしな 附け いきてゐいゐいよしな、のうゐいゐいおれ」の形が全体の約75%を占めていて御船歌の留め方の一形式を作っているわけである。(続日本歌謡集成 卷三) このように浅野藩の御船歌はたゞ単に歌数が多いだけでなく、最も整然とした御船歌の形式をとっているのである。

### 3 調子・文体

殆んどこの歌が七五調の文語口調を中心に作られている為、流暢な語り物の印象を与えられるものが多い。所々口語体地使用され、流行小歌が中に挿入されることにより、その七五調の規則が破れる結果となり、やゝもすれば単調な歌になりがちなのを免れている。例えば「初春」や「秋のゆふへ」の歌において、最初から最後まで殆んど七五調で通されているその中に一箇所「れんほれゝつのれひれしょう／＼にしゃはんまれゝつのれみ」というレンボの囃子詞や、「熊野小比丘尼か コン く腰に指(い) たひしゃく、最少とも ユ すり揚(け) て ナ さゐたらしめた、ら猶よかる エイ いづくに羽をや休むらん」という小歌が入っているが、それによって歌詞の内容に一貫性がなく、単調な七五調の繰り返しであるこの面白さの欠けた歌に何かしら変化とアクセントを付けているように感じられる。なおレンボの歌は浅野藩、御船唄留の双方に無いもので、我藩の挿入と思われるが、これはこの御船歌成立時、この地方で流行の歌であった為、御船歌にも取り入れられたとの見方もできる。

### 4 分類

#### (1) 祝い歌

かさり、黄帝、初春、太平楽、桜そろへ、船黄帝、黄帝、御乗初、朝鮮くとき、藤戸、酒くとき、初春、いなり、松そろへ、あけほの、和船、竹生嶋、子の日の遊び、年玉

「うれし」または「めてたい」で終っている歌全てをこの中に分類したので、その内容は純然たる祝い歌ばかりでなく、色々な内容のものを含んでいる。従ってこれらをさらに

(イ)「かさり、太平楽、船黄帝、御乗初、酒くとき、初春、いなり、子の日の遊び、年玉」などの純然たる祝い歌

(ロ)「黄帝、黄帝、藤戸、和船」などの叙事的な内容を持つ歌

(ハ)「初春、桜そろへ、松そろへ」など物尽し、名寄せの歌

(ニ)「朝鮮くとき、あけほの、竹生嶋」など道行的な内容を持つ歌

のように分類できる。しかし(ロ)の歌を見ると、それらは船の由来とか、海に関係した歌であり、(ハ)の歌は祝い歌にふさわしい朗らかな内容のものや、縁起のよい素材を用いた歌であり、(ニ)は海の道行や船遊びを歌ったものであり、(イ)は勿論のこと、(ロ)(ハ)の歌も全て祝い歌として用いることの多い御船歌の内容にふさわしいものばかりで、「めてたい」または「うれし」で終る歌を一括して「祝い歌」の範疇に入れた。

これらの祝い歌には類型的な表現が多く、

「民のかまとも賑はひて」(かさり、御乗初、年玉)

「戸さゝぬ御代そめてたひなうれし」(かさり、黄帝)

「こまのたてとも浪風もおさまる国そ」(子の日の遊び)

などの言葉が裕福で平和な御代を象徴するものとしてよく使用される。また

「諸国くに／＼大名のエイやかた並び棟つゝき」(太平楽)

「此(の)君の御威勢ハ申(す)はかりハなかりけり」(藤戸)

「君も豊かに民栄へ」(初春)

「天下太平君の御威勢ひときゆたかに民栄へ」(和船)

などの言葉が、藩主の繁栄振りを讃えるものとしてしばしば用いられる。他に、

「松の葉はとしを<sup>ふる</sup>経るほと色増さる<sup>ニイ</sup> 葉色ハおなし深みとり」(太平楽)

「茂れ松山〈さゝんさ浜松の音ハめてたひなうれし」(桜そろへ)

「松吹(く)風もさゞんさ」(藤戸)

「鶴ハ千年、龜ハ万年」(松そろへ)

「鶴ハ千年、龜ハ万年、幾千代久し松の葉色もあを〈と」(年玉)

のように松、鶴、亀を詠み込んだものが多いが、これらの言葉はしばしば御船歌の最後に使用されるもので、内容とは離れて、祝い歌の性格を持たせる為に添加されたものである。そしてこれらの表現の仕方は、年頭に各家を巡って歌舞を見せた万歳楽などの歌に類似しており、これらの間にも何らかの関係が認められる。

## (2) 恋愛歌

寝乱髪、秋の寝覚、寝覚、秋のゆふへ、黄昏、初音、井筒、たかま

恋愛歌といっても、流行小歌をいくつか繋ぎ合わせて一つの歌とした性格が強く、一貫した内容に乏しく情趣に流された感がある。「黄昏、初音」の二つは「松の葉」巻二の「あき草」「若みどり」から撰取されたもので、基は遊女の名寄せとして作られていたもので、内容には乏しいが、発想、表現が古典的である。他のものも大体同一の傾向の歌である。

## (3) 物尽し、名寄せの歌

七夕（川尽し）、魚そろへ、清水まあり（桜尽し）、染色、香具うり（香尽し）、鳥そろへ

物尽しの歌には、次々と並べていく物の名を掛詞として使用している場合が極めて多い。「七夕、魚そろへ、清水まあり、鳥そろへ」などにはその技巧が著しく、歌の内容は低級なものであるが、歌詞の面白さが目を引く。歌の素材としては縁の程遠い魚の名を連ねた「魚そろへ」などは一風変った趣きの歌になっている。また「鳥そろへ」は沢山の小鳥の囀りが今にも聞こえてきそうな賑やかな雰囲気の中で、流行歌とは異った味のものである。

#### (4) 道行の歌

都あたり、都の名所、高嶋もふて 大和歌（路） 嶋里

これらの歌は

「名所／＼を一見せはやと思ひたち」（都の名所）

「一見申さんほのほのと」（高嶋もふて）

「清水八坂打（ち）過ぎて」（都あたり）

「名高き名所そと打（ち）詠め」（都の名所）

「かゝる小歌にほともなし」（都あたり）

「かくて嶋にも着（き）しかば」（高嶋もふて）

などの表現で道行の出発、道中、到着を表わしている。これらの表現の仕方は謡曲からの影響と思われる。「高嶋もふて、嶋里」のような海上の道行が含まれているのは御船歌が水上のものであることに結びついたものであろう。

#### (5) 叙景歌

花瓶そろへ 四季 高嶋

前の二つは四季の草花や景色を歌ったものであり、後の一つは海上の詠めを歌ったものである。一方は四季を配し



て、他方は四方を配して歌ったところに共通した表現の仕方が伺われる。このような景色の叙べ方は常套的な方法で、例えば「初春、初音、嶋里」などにも同様な表現の方法が用いられている。

#### (6) 叙事的な歌

昔、かたり、敦盛、かた、潮くみ、冷泉(1)に入れたもので黄帝、黄帝、藤戸、和船などがある。

「昔かたり、黄帝、黄帝、藤戸」は謡曲の表現または内容に基づいたものであり、「冷泉」は浄瑠璃と関係している。「和船」は日本神話に基づいたものであり、これらはいずれも歴史上の人物または事実が素材となっている。

「潮くみ、かた」は歴史上の事実とは結び付かないが、物語り風な内容のものでこゝに分類した。

以上六種類に分類したが、一つの歌が幾つかの要素から成立しているので、明確な区別をすることは困難であるが、最も主要な点に注目して分類した。

#### 四

各藩の御船歌には、幕府の御船歌を取り入れて作成したものが多く、全国共通の歌がかなりあることは前述したところであるが、岡山藩のものは、どのような共通歌を持ち、いかなる独自性を持つものであるかを、浅野藩御船歌と幕府の御船唄留とを中心に比較しながら検討していくことにする。

岡山藩の御船歌と浅野藩のもので共通な長歌が「かさり(浅「祝掬」)、初春、太平楽、都あたり、秋の寝覚、秋のゆふへ、かた、いなり、船黄帝(皇帝)」の九番であり、幕府との共通歌は「かさり(祝儀)、初春(鑑くどき)、太平楽、都あたり、かた(加田の浦)、いなり(いのり)、松そろへ(松くどき)」の七番であるが、それらの中で浅野藩と御船唄留と同時に共通する歌が六番あるので、実際にどちらか一方と共通する歌が十番となり、残りの三十六番は双方と内容を異にしている。

ところで浅野藩のものと御船唄留とを比較したところ共通歌が十四番あり、御船唄留と加賀藩の御船歌を比較し

たところ、臼田甚五郎氏の調べではやはり十四番となっている。(国語と国文学、S 33・4「近世船歌考」)これらの数から見ると我藩の御船歌は他藩に比べて共通歌が幾分少ないことがわかる。このことは岡山藩のものが独自の歌を多く含んでいるということにもなるが、その独自性がどのようなものか今少し検討してみる。

「初音」は「松の葉」の長歌「若みどり」から摂取されたものであることは前にも述べたが、浅野藩の「松枝」もまた「若みどり」から取られたものである。従ってこの二つの歌を比較してみたところ、歌詞の上に一致は見られず、それぞれ別個に作られたことがわかる。浅野藩のものが「松の葉」に酷似しているが、我藩のものは表現が相当異ってくる。また岡山藩、浅野藩の両藩にある「染色」「染色揃」を比較してみても、浅野藩が「落葉集」の「三ヶの津淨瑠璃之部 染色尽」と同じものであることは明白なことであるが、我藩のものは染色や語彙が僅かに関係を認める程度で、両藩のものは全く別個な創作である。それからまた池田藩、浅野藩、御船唄留の三者に含まれる「敦盛」という歌は、浅野藩と御船唄留のものが同一であるのに対して、我藩のものは全く内容を異にしている。この場合、岡山藩のものが謡曲の一部と一致する点が多く、他方は余り関係が認められない。また御船歌の中で「黄帝」というのは最もボビュラーなものであるが、我藩のものは他の二つと異なった内容となっている。

極めて少数の例からであるが、他藩との共通歌が少ないことも考え合わせて、岡山藩のものは創作上の点においてかなり独自性があるのではないかと考えられる。さらに同一歌における他藩との異同を調べた場合、浅野藩のものと御船唄留とがしばしば一致しているのに対し、我藩のもののみが異同を生じている場合が多く認められる。例えばそれは「初春」や「かた」を比較してみれば直ちに気づく点である。これは浅野藩のものが幕府のものを忠実に取り入れたのに対し、我藩は独自に改変したり、創作を加えなどして「江戸ぎん御船歌」が成立したのではないかと思われる。

ところでやはり岡山藩の御船歌として残されている岡山県郷土史家渡辺知水氏転写の十一番「かざり御乗物、黄

帝、初春、太平樂、都あたり、御乗物、松揃へ、あけぼの、和船、鳥そろへ、鳥里」（岡山市立図書館蔵）と「江戸ぎん御船歌」との関係は、他藩のものに比して異同は少ないが、全く一致しているというわけではなく、時にはそれらの方により近い場合もある。我藩の創作と思われる郷土性の豊かな歌を大坂の御船手歌から転写したという奥書きの存する知水氏の御船歌は、我藩の創作を含めた初期の御船歌が大坂御船手に伝えられていたものであろう。

「江戸ぎん御船歌」の特長は郷土色の豊かさという点で他に負けぬものであると思う。「藤戸、高嶋もふて、あけほの、和船、嶋里」は岡山に因縁した地名が豊富に織り込まれており、容易に我藩のものと識別できうるものである。「藤戸」は古く源平合戦にゆかりのある児島地方に元あった地名で、謡曲「藤戸」にもなっており、この歌はそれから取材していることは明白である。最初の書き出しが謡曲では「春の港の行く末や、春の港の行く末や、藤戸の渡りなるらん」であり、御船歌では「春の湊の行末や、<sup>ユイ</sup>藤戸の渡（し）は是かとよ」で殆んど同一表現である。「あけほの」には極めて多くの瀬戸内海の島々や沿岸の地名が道行となって詠み込まれているし、「和船」には牛窓近くでの故事が取られ、「嶋里、高嶋もふて」には主に児島湾内に面した地名が織り込まれている。以上五つの歌は全て海に関係した歌で御船歌として我藩で創作されたものであろう。「朝鮮くとき」の歌も我藩の創作であろうと想像されるが、歌中の天和二年（一六八二）という年号がその歌の成立に近いものであれば、かなり御船歌の成立時代上初期のものとなろう。以上郷土性の強い歌は江戸時代、瀬戸内海沿岸の各地が内海航路、漁業などの発展で、活気を呈していた事も合わせて思い計られる。

岡山藩の「江戸ぎん御船歌」を一読した場合、何か変化に乏しい単調な感じを与えられる。それは全てが形式の上からは長歌に限られており、内容の上からは表現が古典的であり、御船唄留や浅野藩のものに見られる「何々ぶし」とか「何々おどり」とか端歌の類が存在せず、また民謡的な歌も少なく同一傾向の歌が多い為であらう。岡山藩のものには僅かにレンボの離子詞や踊歌の文句や流行小歌が長歌の中に散在しているのが、単調さの中に変化を

与え、近世調を漂よわせている。江戸時代初期の町人の気分を反映した享樂的な明かるさには乏しく全体として類型的である。

岡山藩の「江戸ぎん御船歌」は、以上調べた所では郷土性の豊かな創作歌がかなり含まれている点が長所であり、歌の内容、種類、形式の上で乏しいところが不足な点であろう。

（本学十六回卒業、岡山大学研究生）